

延辺と私 (その5・完) .....	1	NEAR Recommends .....	14
新任研究員紹介 .....	5	NEAR 短信 .....	15
回顧と展望 .....	7	NEAR センター市民研究員の活動一覧 .....	16
北東アジアの研究最前線 .....	13		

## 延辺と私 (その5・完)

島根県立大学・副学長、NEARセンター研究員 飯田 泰三

1992年8月11日、9時過ぎ、われわれ法政大学「北東アジアの国境地帯の国際関係・国際交流ならびに少数民族の実態および課題と展望」に関する調査団一行は、延吉市内のホテル白山大廈を出て、南々西の龍井市に向かって出発した。

延吉市外に出る道が、鉄道線路を超える踏切のところで大渋滞を起こしていた。龍井市に入ると、まず龍井中学を訪れた。古くからこの地にあった朝鮮族の中学校——大成中学・光明中学・光明女子中学・東興中学・恩眞中学・明信女子中学——が解放後、聯合して成った中学である。

旧大成中学の古い建物の一角に、歴史記念館があった。金允哲総務主任の案内で同館を参観した。各学校の沿革、卒業生の抗日烈士の写真などがパネル展示されている。中でも、光明中学出身で延禧専門学校（現、延世大学校）卒業後、日本に留学し、立教大学を経て同志社大学に在学中、治安維持法違反の嫌疑で逮捕されて懲役2年の刑を受け、福岡刑務所で服役中に獄死した『空と風と星と詩』の詩人、尹東柱（ユン・ドンジュ）と、その従弟で同じく福岡刑務所で獄死した宋夢奎（ソン・モンギョ）のパネルが目についた。

そのあと龍井朝鮮民俗博物館へ行く道が不確かなので、たまたま龍井中学から出てきた

女の子（5年生、金紅珠）に道を聞いたところ、車に同乗して連れて行ってくれることになった。同館は街を見下ろす丘の上に最近できた博物館で、琿春地方の典型的な朝鮮族農家を再現した建物と、民俗資料を展示した資料館とから成っていた。参観後、韓光雲副館長と申吉哲館員に話を聞いた。

きのう延辺博物館で聞いた老頭溝万人坑「屍骨館」は、80年代初め以降、展観をやめ、今は管理人が1人いるだけで、保存のために窓も入口も封鎖してしまっている状態なので、参観は不可能ということだった。また、龍井から東に17.8キロ入ったところにある開山屯鎮は、もう一つの朝鮮との国境の町であり、かつて吉会（吉林—会寧）鉄道が走っていたところなので、行ってみたいといったのだが、あまり見るべきものはない、と要領を得ない返事だった。

尹東柱の墓が、この博物館のある丘の上をさらに畑の中の農道をしばらく入っていったところにあるはずなので、行こうとしたところ、前日の雨で農道がぬかるんで車輪が空転し、四輪駆動のランドクルーザーでも進むことができない。あきらめて、尹東柱の墓には後日、長白山からの帰りに寄ることとして、龍井市内に下り、まず金紅珠さんを龍井中学まで送り、ついで日本（間島省）時代の領事

館の建物（現、市档案馆）と「龍井 地名起源之井泉」を見たあと、ガイドの金（香福ヒャンボ）さんの案内で、園芸学校の教室だったのが旅行者相手の食堂と土産物屋になっているところで昼食をとった。朝鮮料理の豆腐や、ムックという、ドングリの実を挽いた粉を原料にしたカンテン状の冷菓、また日本風の味噌汁に少し唐辛子を利かせたもの、さらに生のニンニクにただ味噌をつけて食べるものなど、なかなか美味しかった。

食後、運転手とも相談したのだが、彼は老頭溝も開山屯鎮も未開放地区だから行きたくないという。ではしょうがないので、延吉周辺の朝鮮人集落として前日、延辺博物館副館長がいくつか名前を挙げていたものの一つ、小営という集落に回って延吉に帰ることにする。しかし行ってみると、同所は今はすっかり延吉の市内に取り込まれ、工場と住宅と畑が入り混じった、さして特色のあるとも思えない場所だった。（その向こうの丘の上に、朝鮮族技術大学が建設中だった。）

予定より早く、午後4時ごろホテルに帰着したので、徐と飯田と金は、延辺博物館まで徒歩で赴いて、金哲洙副館長から『東北抗日聯軍闘争史』を受け取り、帰路、地元の薬屋に立ち寄ることにした。往路、頭を丸坊主刈りにした異様な一団が道路工事をしていたのを、金さんに訊ねたところ、囚人労働ということだった。

薬屋に入ったころから雷が鳴り、土砂降り豪雨になって、前の道は川となって流れ出した。しばらく薬屋で雨宿りを余儀なくされた。停電となり、蠟燭の明かりで買い物をした。そこの初老の女主人は、国民学校で覚えたという上品な日本語を話す。雨が上がったので白山大廈まで戻ると、その前のロータリーが完全に水没しており、目の前に建物があるにもかかわらず渡れない。やむなくタクシーで大迂回して帰館した。（1時間後に夕食のためにホテルを出るときには、もう水は退いていた。）

夕食は国際旅行社の食堂でとった。（何回かに一回はそうしなければならないらしい。）食後、同じ建物にある土産物売場に案内され

たが、韓国人旅行客でいっぱいだった。彼らはおそらく全員が長白山（白頭山）観光で来ているのだろう。同山は朝鮮族にとっての聖地だから。

午後9時、ホテルの部屋に杜進氏が来訪した。氏とは2日前、偶然ホテルのロビーで邂逅したのだが、太田と飯田は昨年、北九州市の国際東アジア研究センターを訪れた際、その主任研究員としての氏の説明の明快さに感銘を受けたことがあり、また、太田と飯田が法政大学大学院で指導している馮正宝君の上海時代以来の友人でもあることから、一夜語ろうと呼んだものである。彼は北九州市国際アジア研究センター研究員と北九州大学産業社会研究所助教授を兼ねているのだが、今回たまたま一橋大学の渡辺利夫教授を団長とする学術調査団に加わって延辺に来ており、同じ白山大廈の別館のほうに泊まっているのであった。

そこへ、30分ほどして辺英浩君も、自分の論文の抜き刷りと葡萄酒と瓜を持参して現われた。杜進君の相変わらず明快な中・韓・朝・日・の国際関係と経済交流の現状についての分析、辺君が延辺で実感した朝鮮族の普通の人々の、南北朝鮮に対する率直な感じ方、漢族や日本人に対するデリケートで屈折した感情の紹介など、きわめて有益な話が聞けた一夜だった。午前2時、就寝。

8月12日、長白山へ向かう日。気象情報によると長白山方面もあまり天候がよくないので、なるべく早く行って晴れ間を待たうほうがよく、また、前日に龍井に行ったとき経験した、延吉市を出る際の鉄道踏切での交通渋滞を避けるには、早朝に出発した方がよいというガイドの意見で、午前6時過ぎホテルを出発する。

8時前、昨日と同じ園芸学園風の建物の食堂で朝食をとり、長白山へ直行する。龍井を出て間もなくから広がる青々した水田地帯に、朝鮮族の小集落が点在する。丸みを帯びた藁屋根と、白壁と、青く塗られた窓枠とが特徴的である。西城鎮から臥龍あたりまで、林業用の鉄路沿いに進んだあと、林道に入る。

漁浪村の手前で老人に、何か抗日記念碑の

ようなものがないか尋ねてみたが、要領を得ず、村には入らないで道路から村の遠景を撮影する。やがて人気のない参道に入り、峠を越えて三道を過ぎる。ここでは、道の両側に農作物や日用品を商う屋台が並び、市のような賑わいをみせていた。松江鎮を経て、午前11時半ごろ、二道白河に着く。長白山への登山基地として旅館が軒を連ねている。

付近の農民がさかんに野生の人参と称して、苔と泥にまみれたものを売りに来る。自分の畑で育てた人参を野生に見せかけて、高く売りつけようという魂胆らしい。二道白河を出たあたりから、道はゆっくり傾斜を直ぐ長白山の方へ登り始める。

午後1時ごろ、天池へ行くゲートのすぐ下にある天池賓館に着く。空は雲がたれこめ、とうてい今日中は晴れそうもない。ホテルはバンガロー風の平屋をくっつけた造りで、外観は洒落ているが、部屋の内装はお粗末で、シャワーの湯は夜8時から一時間だけしか出ないらしい。2,300メートルくらいの山の上だから止むを得ないかもしれないが、結局、この日はゆっくり休養の日となる。昨夜ほとんど寝ていない我々にとっては、なによりであった。この賓館には韓国からの団体客がほとんどで、カラオケ室で楽しむ様子が終夜聞こえていた。

8月13日朝、起きると外は青空のひろがる晴天だった。朝食の後、7時過ぎ出発する。運転手の陳氏の姿は見え（車が故障だという説明であったが、後にそれは事実でないことが判明する）、別の運転手のジープで山頂をめざす。

林業局の入山ゲートで入山料を払う（759元）。ゲートのあたりには、双龍、鯨京など韓国の財閥グループの大看板があった。ゲートを通過して間もなく、道路は立派な舗装路となる。温泉、岳樺賓館、滝（長白瀑布）への分岐点のあたりを過ぎると、道は大きなカーブを繰り返し、勾配は急になる。周囲は見事な原生林。森林限界を越えると、雄大な裾野の樹海が一望される。路上には岩石が多く、エンコして停車中の車も数台ある。

8時半ごろ、山頂直下の駐車場に到着する。ここより数十メートルは、かなりの急勾配の小石混じりの傾斜を、徒歩で登る。骨折でギブスを付けた太田団長も、金さんの援助を受けながら懸命の登攀をする。10分ほど後には全員、ついに天池を見下ろす峰に立つ。

長崎から来たらしい、九州弁を話す在日とおぼしき初老のカップルがいた。その他はすべて、韓国からの観光客と思われる。女性客のうち、眺望のよい場所でわざわざチマ・チョゴリに着替えて記念撮影をする人々がいる。また、天池の畔の方へかなり降りたところで、肩を組み、腕を振って、「われらの願いは統一」を合唱するグループもあった。（この歌は、韓国の民主勢力の間でよく歌われてきたが、ここ2、3年、民族統一への熱気の盛り上がりを反映して、北朝鮮でも歌われるようになった、とは徐さんの解説。また、腕を振るスタイルも、韓国の学生運動・労働運動の流儀のよし。）

上空は快晴。寒風。当初はガスに覆われて霞んでいた天池も、やがてガスが晴れて全景をあらわす。思いのほか、揺り鉢状に深いカルデラ湖である。対岸の北朝鮮側の將軍峰も、くっきりと見える。振り返れば、樹海の広がりが大パノラマとなって望まれる。

なお、私は19年後の2011年8月、この長白山天池を再訪する機会を得た。法政大学大学院国際日本学インスティテュートで博士論文「図們江北岸朝鮮系住民社会史の展開と日本」を書いた尹虎（ユ・ノ）君が、出身地の延辺大学に就職し、延吉の女性と結婚することになって、その結婚式に私たち夫婦を呼んでくれ、式の後、天池と大連・旅順を案内してくれたのだ。

19年ぶりの天池はまったく別世界に変貌していた。高度成長を続ける中国社会が生み出した中産階級が、国内・国外の観光地に大量に繰り出し始めており、その中で、長白山/白頭山は、その管理管轄権が延辺朝鮮族自治州から吉林省に移り、中国の国家級の観光資源として開発が進められているのである。

入山口のゲートから標高2000m付近にある

頂上（2600m余）へのシャトル（15人乗りのベンツ）の乗継場までのバスはそれほど混雑していなかったが、乗継場ではシャトル待ちの大行列が出来ており、2時間近くも待たされた。おそらく一日の入山者は何万人かに上るのであろう。頂上の天池を見下ろす眺望のよい場所は大混雑で、写真を撮るために立ち止まることも難しい有り様である。

また、驚いたのは、ハンゲルの表示がすっかりなくなっていたことである。山の名前も「長白山」のみ、案内板などの掲示も中国語と英語・ロシア語のみとなっていた。朝鮮族の聖地としての白頭山は一掃され、中国人のための観光地としての長白山に統一されてしまったものらしい。

およそ30分ほど山頂にとどまったのち、下山する。太田団長はコートの裾を尻の下にして滑り降りる。帰路、滝（長白瀑布）の方へ分岐して停車。そこから徒歩で滝を見に行く。ジープでそこを出発して間もなく、陳運転手のランドクルーザーに出会い、乗り換える。どうやら陳氏は、早朝から他の客を山頂に運ぶアルバイトに精を出していた模様。

ゲートを出てから、陳氏の勧めで長白山自然博物館へ。虎、オオヤマネコの剥製など。庭にはミグ15戦闘機が展示されていた。二道白河を経て、松江鎮で昼食。手打ちの冷麺ほか朝鮮料理。

三道を過ぎ、峠道に入って、往路の「林道」から東に逸れて、旧道の青山里・和龍方面に向かう道に入る。運転手も初めて通るとのこと、しきりに地図を見る。「林道」より交通量は少なく、道幅も狭いが、案じたよりは整備された道である。分岐してすぐ、路上に貂らしき小動物が現われ、陳氏は車を止めて石を拾って追う。が、取り逃がす。

林業の作業車と2,3度出会ったほかは、行き交う車もない。最初の集落の分岐点で道を間違ったものか、地図では青山里に至る道はほとんど直線であるのに、行く道は曲折と昇降を繰り返し、なかなか青山里に辿り着かない。およそ2時間のドライブの末、やっと青山里に到着したのは午後3時頃であった。1920年8

月、ここ青山里で繰り広げられた日本軍と間島パルチザンとの戦闘で、パルチザン側が勝利し、「日本軍の無敗の神話を打ち砕いた地」である。しかしここに戦跡や記念碑があるわけでないことは、あらかじめ解っていたので、せめてその辺りを通過してみたいと思ってみたまでである。「青山林場」の看板がかかる、やや大きな林業局の前で車を止める。その門前にたむろする村人が数人いる。隣は小学校。村人からアイスクャンデーを買った。

（なお、2012年8月、鳥根県立大学NEARセンターのリサーチ・ツアーで延辺調査をおこなった際、同所を訪れたところ、大きな「青山里抗日大捷記念碑」が建てられていた。しかし同所に併設されて資料館になるはずだった建物は、未整備のまま放置されていた。その近くの和龍市牛心村の「金日成抗日根拠地」なる洞窟も、草むらに埋もれ、穴の大半がすでに埋没している状態だった。）

青山里からは道路幅が広がる。30分ほどで進行方向右手に和龍炭鉱のボタ山が見え、和龍市内に入る。和龍市は龍井市よりも若干、人口は多い感じ。龍のモニュメントや駅舎などを見てから、龍井に向かう。このあたりの水田でとれる米（昭和初年、東北以北の寒冷地向けに開発された「農林一号」が間島省に入ったものだという）がいちばん美味しいよし。

午後4時半ごろ、龍井に到着。ただちに尹東柱の墓へ向かう。なだらかな丘、トウモロコシ畑の中の農道を車で登る。前夜までの雨で道はぬかるみ、車は結構、難航する。しかし今日は陳運転手もやる気を見せて進む。青空に晚い午後の光線のなか、黄牛を追いつつ帰路に着く農夫。遙かにひろがる龍井盆地の眺望。吹く風に初秋の気配が漂う。

途中、2度ばかり農民に墓の場所を問うたのち、金さんの記憶をたどって墓を発見する。龍井中学校の展示室の写真で見たとおり、墓碑には「詩人尹東柱之墓」と記され、裏面に漢文で略歴が彫られていた。墓碑の後方の土盛りの周囲には、コンクリートで円環状の囲いがある。墓碑の前には「龍井中学校修繕一九八八年六月」と金文字で彫り込まれた

テーブル上の黒い石台があり、その側面には「龍井中学校同窓会」と並んで「美国中国韓人友好協会」の文字も見える。

丘の斜面を覆い尽くして、周囲はすべて墓また墓である。いずれも草むした土盛りの前には簡素な墓石を立てただけのものである。(韓国では1970年代以来、虚礼廃止と土地の耕地面積減少を防ぐため、このような形式の墓は漸次見られなくなりつつあるとのことである。) ここにおよそ15分とどまり、撮影な

どの後、延吉への帰途についた。

翌日、1992年8月14日、8時30分発の中国北方航空6691便で延吉空港から瀋陽へ飛び立った。

私たちの最初の延辺訪問行は終わった。

このあと私は5回、延辺を訪れる機会があったが、この最初の延辺との出会いのときの強烈な印象こそが、私のその後のアジアへの深入りを決定づけたといつてよい。(完)

## 新任研究員紹介

《NEARセンターは、2014年4月より新たに2名の新任研究員を迎えました。研究助手のお二人、高一研究員と山本健三研究員をご紹介します(編集部)》



NEARセンター研究員

高 一

本年4月から北東アジア地域研究センターの嘱託助手として着任した高一(コ・イル)と申します。東京生まれの在日朝鮮人3世です。ソウル大学校大学院外交学科への留学などを経て、一橋大学大学院法学研究科博士課程を修了しました。2009年から今年の3月までは成蹊大学アジア太平洋研究センターで研究員を務め、その間に研究成果として『北朝鮮外交と東北アジア 1970-1973』(信山社)を上梓しました。現在はNEARセンターに在籍しながら、1970年代中盤における南北朝鮮の外交と国際関係について研究を進めているところです。

私は、大学院博士課程在籍時から1970年代の東アジア国際関係の構造的変容と南北朝鮮

の対応について研究しはじめました。その大きなきっかけとなったのは、2000年6月に金大中大統領が訪朝し、金正日国防委員長との間で実現した南北首脳会談でした。首脳会談の実現に象徴的なように、当時、南北朝鮮関係の改善が進むことによって北朝鮮とアメリカの間でも対話が行われ始めました。このような実際の国際政治における事態進展を目の当たりにすることで、南北朝鮮関係の持つダイナミズムと東アジア国際関係の展開を歴史的に研究しようという「やる気」が高まってきたのでした。この地域の平和を構想するためには、今日まで辿ってきた歴史を知る必要があると考えたのです。

このように私自身が進めている個別の実証研究は1970年代に集中していますが、元々は第2次世界大戦後の朝鮮での政治的展開と東アジア国際関係について、とくに「朝鮮戦争への道」に関心を持って大学院に進学しました。現在は、この1950年を前後する時期について研究していませんが、やはり朝鮮戦争という事象は、常にこの地域の過去・現在・未来を考えるうえでの引照基準になっています。私の研究対象時期である1970年代もそうですが、今日の朝鮮半島と東アジア国際関係を考える際の一つの大きな要素といつてもいいと思います。朝鮮戦争は、解放後(第2次世界大戦後)の国づくりの過程における一つの帰結として生じた内戦であり国際戦争でもあったのですが、この戦争での停戦が現在においても南北朝鮮を分断する線になっていま

す。過去60年以上もの間、この停戦と分断の線をどのような方法で克服するのかといった問題が様々に問われてきたと思いますが、この点は朝鮮半島のみならず、今後の東アジアでの平和をどのような形で追求するのかという点からも重要になります。朝鮮半島での軍事的緊張は東アジアの緊張でもあるからです。

さて、この原稿を書いている時点（6月末）で、浜田に来てから3ヶ月が経ちました。まだ3ヶ月しか経っていませんが、海と山に囲まれた浜田での生活を思いのほか楽しんでいきます。これまで浜田にはこれといった縁はありませんでしたが、NEARセンターが浜田と私をつないでくれました。NEARセンターの研究室から浜田の海を眺め、さらに地図に目をやると、浜田と朝鮮半島の距離的な近さにあらためて驚きます。朝鮮半島に近いこの場所で、東アジアの平和を考える研究が進展するよう努力したく思っています。



NEARセンター研究員

### 山本 健三

今年4月、本学北東アジア地域研究センター助手（ロシア語担当）に着任しました。それ以前は、韓国・華城市にある長安大学校外国語学部観光日本語学科で、専任講師として日本語教育に携わっていました（2010～13年）。出身地は広島県東広島市で、大学入学で上京するまで住んでいました。その後、仕事や学業のため、大阪、モスクワ、札幌、韓国の水原と転々としてきましたが、島根県に来ることになり、故郷に戻ってきたような気持で過ごしています。

専門は、19世紀後半のロシア政治思想史です。大学卒業からしばらくの間、ある民間企業に勤務していましたが、退職し、1999年から2001年にかけてモスクワ国立大学哲学部政治学科に留学しました。そこで「ミハイル・

バクーニンの政治哲学」というロシア語の拙文を書いたことが、私の研究生生活の始まりです。これはのちにロシアで出版されました。

帰国後は北海道大学大学院で、「ポーランド問題」、「バルト・ドイツ人問題」という1860年代にロシア帝国を震撼させた民族問題、そしてそれらに対抗するロシア・ナショナリズムの生成過程を軸として研究してきました。2009年11月に北海道大学に提出した学位論文では、1860年代後半のロシアとバルト海沿岸地方の定期刊行物の中で激しく展開した、バルト海沿岸地方（現在のエストニアとラトヴィアに相当）とバルト・ドイツ人の特権に関する論戦とロシア・ナショナリズムの関係性について論じました。そこでは、元々ロシアの体制側エリートと緊密に結びついた特権階層として、民族的主体とは見なされていなかったバルト・ドイツ人が、定期刊行物上の論戦を通じて「反ロシア的陰謀」を企む危険な「ドイツ民族」に転換する過程を論じました。そして、「ポーランド人の陰謀」に対抗する形で1860年代前半に燃え上がったロシア・ナショナリズムが、60年代後半に「ドイツ人の陰謀」というさらなる危険な要素を見出したことでさらに強化され、1880年代以降、特に顕著となる「大ロシア主義」の礎となったことを明らかにしました。この学位論文の作成のため、2005年から2006年にかけて、外務省の外郭団体である日露青年交流センターの研究フェローとして再びロシアに滞在し、モスクワ、サンクトペテルブルク、リーガ（ラトヴィア）、タルトゥ（エストニア）の文書館で未刊行の一次史料を渉猟しました。大学院修了後も、しばらくの間は「ポーランド問題」および「バルト・ドイツ人問題」に関する論文を書いていました。

しかし、上述のように韓国の大学に勤めていましたが、そこで韓国語や韓国思想を少し齧ったのをきっかけに、最近は北東アジア全体の問題にも関心を寄せています。具体的には、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、ロシアを含む欧米の社会革命家たちのアジア観に関心があります。2013年6月に発表した拙稿「M.A.バクーニンにおけるアジア問題—

G.マツイーニ批判と「黄禍」一(『スラヴ研究』第60号)は、そうした近年の関心に基づく研究の端緒です。今後も北東アジアを見据えたロシア研究、思想史研究を続けていきたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

## 回顧と展望

(NEARセンター研究員  
2013年度研究活動自己点検)

《NEARセンター研究員(2013年度から所属継続)が、過去1年間の研究活動を振り返り、今後の展望を語ります(編集部)》

NEARセンター長 **李 曉東**

2013年度は、現在取り組んでいる中国社会の「立憲」の問題と「自治」の問題について、それぞれ論文を著しました。

- ①「立憲の中国的論理とその源泉」(『政治思想における言語・会話・討議』[『政治思想研究』第13号]、2013年5月)
- ②「『つながり』の形成と『政治』の役割—コミュニティ建設に見る『社区居民委員会』の取り組み」(『中国21 特集：中国社会の矛盾と展望』第40巻、東方書店、2014年)

前者は、近代中国の知識人たちの近代的「立憲」に対する理解のなかから独自の論理を見出し、その源を『易』に遡って考察しました。後者は、「断裂社会」と呼ばれている現代中国社会において、人と人との間の「紐帯」をいかに取り戻すかという視点から、都市基層社会のコミュニティ自治の可能性について考察しました。なお、『中国21』の特集号の座談会にも参加し、中国社会学の第一線で活躍されている中国の先生方と討論することができ、たいへん勉強になりました。当課題は今年度以降も科研で研究を続けてまいります。

また、報告では、以下のシンポジウムで研究発表をしました。

- ①4月、「軍国民思想と近代中国ナショナリズムの形成」、国際シンポジウム「蒋介石と近代中国」(於中国浙江大学)。
- ②9月、講演「近代中国の革命観」(於中国東北師範大学東亜文明中心)。
- ③10月、“Yan Fu (嚴復)’s Idea of Liberty”、国際シンポジウム「啓蒙主義と東アジア」(於ドイツ・イエナ大学啓蒙主義研究所)。
- ④2014年1月、「中国人留学生と軍国民思想」、神奈川大学留学生史研究会・科研(基盤研究C)「近代中国のナショナリズムの形成と明治日本」(代表:李曉東)合同シンポジウム「中国人留学生と近代日本」(於神奈川大学)。
- ⑤2014年2月、「中国における『市民社会』の語り方」、本学と北京大学国際関係学院の合同シンポジウム「中国式発展の独自性と普遍性—『中国模式』の提起をめぐって」(於鳥根県立大学)

なお、科研の最終年度にあたり、報告④は論文にまとめて発表する予定です。報告⑤は論文②から発展させたものであり、やはり今年中に論文にまとめたいと思ひます。

NEARセンター副センター長 **福原 裕二**

2013年度の研究活動を振り返る時、まずはお詫びを申し上げなければならない。『北東アジア創成シリーズ』の執筆が大幅に遅延していて、センターのみならず、各方面に多大なご迷惑をかけていることである。ひとえに筆者の能力不足と怠惰のせいである。ここでお詫び申し上げるとともに、一日も早い脱稿を期したいと思ひます。



納沙布岬より貝殻島を眺める

さて、昨年度はその年度より新たに始まった科研（「領土問題と漁業問題の交錯状況の克服」基盤B：以下、新科研）の調査と、ここ数年継続的に行っている中朝国境における定点観測、一昨年度で研究期間が終了した科研（「新視角に基づく竹島／独島の総合的研究」若手A：以下、旧科研）ほかの調査の取りまとめなどを主な研究活動として遂行した。新科研は旧科研において、「領土」を生活圏に含む地域・人々の視点から領土問題を眺めると、たとえば生活に直結する漁業の問題は領土問題にかすめ取られて不可視化してしまう悪しき構造がある一方で、その構造の中で苦闘する人々の努力やそこで生まれ出た知恵を浮き彫りにすることができた、という知見の下で着想された。これは日本が抱える領土問題のすべてに通底する構造や行態ではないかと仮定し、その検証と‘努力・叡智’の掘り起こしに取り組むものである。その第一弾として北方領土問題の最前線の地である根室に出かけた。



（金日成の妻の名を冠した金正淑郡。なぜか「石田洋服店」なる看板を掲げた建物が見える）

中朝国境における定点観測は、北朝鮮、中朝関係、国境におけるヒト・モノ・カネの現状分析、いわゆる脱北者の動向を追跡するために行っている。今年度の調査の一端は本誌第45号（北東アジア時事通信「中朝国境の動向に見る“北朝鮮”」）に記したので、それに譲りたい。また、旧科研などの従来研究の取りまとめは、『たけしまに暮らした日本人たち』（福原裕二著、風響社、2013年10月）、『アジアの「核」と私たち』（高橋伸夫編、慶應

義塾大学出版会、2014年3月）、『アジアからの世界史像の構築』（湯山トミ子／宇野重昭編、東方書店、2014年6月）、『領土という病』（岩下明裕編著、北海道大学出版会、2014年7月）を参照いただきたい。

今年度は、新科研の調査を深めるとともに、4月から日韓・日朝交流史研究会での共同研究としてスタートした「日韓・日朝関係における‘心の問題’の調査研究」を軌道に乗せ、外部資金を獲得することが主な課題である。その展望は暗くないと思っている。

NEARセンター長補佐 佐藤 壮

2013年度の研究活動では、中国が東アジア地域の国際秩序形成に与える影響を考察するとともに、北方領土問題における周辺自治体・地域の実情を調査することに力点を置き、次の3つの取り組みを中心におこなった。

第一に、江口伸吾・NEARセンター研究員が研究代表を務めるプロジェクトに参加し、改革開放後のめざましい経済発展と社会変動を「中国模式」として描き分析することをめぐる多様な論点を考察する機会を得た。同プロジェクトの一環で、2013年9月4日～7日に中国・北京を訪問し、清華大学や北京大学の研究者との意見交換を通じて、中国の発展経験を「モデル」と呼び分析対象とすることには、社会科学の方法論や概念操作の観点から西欧中心主義的思考に陥る懸念が抱かれていることが明らかになった。また、中国社会の伝統に根ざした生活空間に目を向けつつ、「国家－社会」、「官－民」、「公－私」の二項対立を超えた分析手法を模索する動きがあることも判明した。これらの意見交換を踏まえて、同プロジェクトの国際シンポジウム（2014年2月14日）で「新興大国・中国と東アジア地域秩序－国内秩序と国際秩序の相互作用の観点から－」と題する報告をおこない、中国が東アジアの国際秩序形成に影響力を行使するとすれば、その秩序はどのような特徴を持ちうるのか考察した。

第二に、東北師範大学東亜文明研究中心を訪問し（2013年9月17日～20日）、「共振する



中国と国際社会」と題する報告をおこない、中国自身が国際秩序形成の担い手となる場合に、中国は既存の国際秩序にどのような変容を迫っているのか、「保護する責任」や「人間の安全保障」といった国家主権を相対化するような国際規範の拡大が中国にどのような影響をもたらしているのか、といった論点を考察した。

第三に、福原裕二・NEARセンター研究員の研究プロジェクトに同行し、北方領土隣接地域として根室地区の行政や漁業団体が北方領土問題と地域の生活空間をどのように結びつけてきたのか、インタビューを中心に調査をおこなった（2013年11月7～9日）。

以上2013年度の研究活動のうち、第一の取り組みは、2014年度から北東アジア地域学術交流研究助成金プロジェクト「中国の台頭と北東アジア地域秩序の変動—中国国内統治との共振性に着目して—」（研究代表・佐藤壮）の中で発展させていく予定であり、また、第二の取り組みは、2014年11月に東北師範大学の研究者を招聘して開催する国際シンポジウムでさらに議論を深める予定である。

上述の個人研究活動以外のNEARセンター関連の学術活動として、『北東アジア研究』第25号の編集およびNEAR Newsの編集に携わったほか、島根国際学術シンポジウム2013（11月14日～15日）でのコメンテーターを務めた。

NEARセンター研究員 **石田 徹**

2013年度の研究活動はおおよそ以下の通りである。

①「近代移行期における東アジア国際秩序」に関する研究：科研費・若手研究（B）「〈外交儀礼〉を通じて見る近代移行期東アジアの国際秩序」（課題番号：24730147）に関連して、前年度に引き続き長崎県対馬歴史民俗資料館の宗家文庫の史料調査に加え、2013年度は韓国国史編纂委員会所蔵の宗家文庫の史料調査も行い、関連史料を収集した。目下その整理・分析中である。

②近代日朝関係に関する研究：科研費の研

究成果公開促進費の交付を受け、2007年に提出した博士論文に若干の加筆修正を加えたものを出版した（『近代移行期における日朝関係』溪水社、2013年）。

③NEARセンターでの出張：2013年8月28日～9月1日に昨年に引き続き延辺朝鮮族自治州への調査出張（延辺済州プロジェクト）に参加した。同じく9月16日～21日にはNEARセンターとの交流協定締結ため中国東北師範大学東亜文明研究中心を訪問し、そこで開かれた研究会では「華夷秩序をめぐって」と題する報告も行った。また10月23日～27日には韓国済州島調査出張（延辺済州プロジェクト）で、昨年度3月に行った調査の追加調査を行った。

今年度以降の展望としては4点挙げておく。

①「近代移行期における東アジアの国際秩序」に関する研究：引き続き科研費の研究課題に取り組む。なお、今年度が最終年度に当たるため、成果の一定のとりまとめに努めたい。

②延辺済州プロジェクトに関連して、井上治研究員と協力して、済州調査時につながりができた済州の歴史学者金日宇氏を中心に著わされた済州とモンゴルとの歴史についての本の翻訳作業を進めており、今年度中に刊行する予定である。

③①に関連して、明治初期の日本の外交政策と対外観の関係についての再検討を進めたい。冒頭の研究テーマのおかげで、研究対象の時代が遡る一方なのだが、2013年度の拙著刊行を契機に、少しでも時代を下らせるべく、研究に取り組みたい。

④昨年この場にも記したことだが、韓国政治思想史に関して、朴忠錫『[第2版]韓国政治思想史』の翻訳作業がある。諸事情により遅れ気味ではあるが、来年度には出版の運びとなる。

NEARセンター研究員 **井上 厚史**

○2013年度は、以下の調査及び研究をおこなった。

- (1) 島根県立大学北東アジア地域研究センター『北東アジア研究』別冊第2号、2013年5月、「儒教は「東アジア共同体」の紐帯となりうるか」、95-116頁。
- (2) 島根県立大学北東アジア地域研究センター『北東アジア研究』別冊第2号、2013年5月、韓東育「東アジア研究の問題点と新思考」(原文中国語)の翻訳、147-187頁。
- (3) 『朱子学年鑑(2011-2012)』、厦門大学出版社、2013年3月、「朝鮮儒教在東亜的地位的研究-日本朱子学重大課題」、259-262頁。
- (4) 『講座 東アジアの知識人』第2巻、有志舎、2013年11月、「愛国啓蒙運動と張志淵-「東方の君子国」の儒者の誇り」、206-223頁。
- (5) 韓国東洋政治思想史學會『韓国東洋政治思想史研究』第13巻1号、2013年3月、「근대일본에서의 이퇴계연구의 계보학-아베요시오·다카하시스스무의 학설검토를 중심으로- (近代日本における李退溪研究の系譜学-阿部吉雄・高橋進の学説の研討を中心に-)」、197-239頁
- (6) 『現代思想』vol.42/4、青土社、2014年3月、「封印された朝鮮儒教」、114-126頁。
- (7) 東アジア史学研究チーム第二十一回シンポジウム「東アジア研究のケースと方法」、「近代日本における「軸文明」と軍国主義の台頭」、東北師範大学東亜文明研究中心、2013年9月
- (8) <「心身/身心」と「環境」の哲学-東アジアの伝統的概念の再検討とその普遍化の試み->2013年度第5回研究会、国際日本文化研究センター、平成26年1月、「明代心学と李退溪心学-朝鮮儒教の多様性と独自性-」
- 来年度は科研の最終年度であり、これまで積み重ねた成果を『朝鮮儒教へのアプローチ』と題して出版する予定である。また、『原典朝鮮近代思想史』全6巻(岩波書店)の出版が正式に決定し、第1巻の編集協力者として出版に向けて尽力したいと思っている。

NEARセンター研究員 **江口 伸吾**  
2013年度の研究活動は、現代中国政治の研

究を進めるとともに、基礎的な知識を整理する機会に恵まれた。以下に、その概要を紹介する。

第一に、グローバル化が進むなかで、21世紀の新たな国際秩序を構想するためのテキスト作りに参加したことがあげられる。とくに、新中国成立から改革開放までの状況をまとめ、中園和仁編著『Minervaグローバルスタディーズ③/中国がつくる国際秩序』(ミネルヴァ書房、2013年、第5章「新中国の国家建設」を分担執筆)として公表した。

第二に、書評を通して現代中国の政治社会の変化に関して考察したことである。とくにこの分野で代表的な研究の一つである菱田雅晴編著『中国-基層からのガバナンス-』(法政大学出版局、2010年)の書評を執筆し、『中国研究月報』Vol.67 No.4 (No.782)に掲載された。

第三に、人名辞典の作成に関わる機会をいただいたことである。現代中国の人物を分担執筆し、岩波書店辞典編集部『岩波世界人名大辞典』(岩波書店、2013年)に収められた。

最後に、2014年2月14日、北京大学国際関係学院の先生方を島根県立大学にお迎えして、国際シンポジウム「中国式発展の独自性と普遍性-『中国模式』の提起をめぐって-」を開催したことがあげられる。このシンポジウムは、平成24~25年度北東アジア地域学術交流研究助成金「『北京コンセンサス』と日中関係の行方-北東アジアにおける国際秩序の変化をめぐって-」(研究代表:江口伸吾)の研究活動の一環として開催され、第1セッション「中国における国家と市民社会」において「現代中国の国家建設と『公民社会』のガバナンス-近代化のプロセスと基層社会の変容を焦点にして-」を報告した。日中関係は、国交正常化以来最も悪化した局面に至ってしまったが、2000年の本学の開学以来続く北京大学国際関係学院との学術交流を通して、中国の発展方法と北東アジア地域秩序の関係について意見交換できたことは、未来の北東アジアを構想するための示唆を与えてくれる貴重な機会となった。

現代中国政治は、国内の政治社会の変動や

北東アジアの国際環境の複雑化などさまざまな要因によってその行方が左右される転形期にある。このような時代を迎えるなかで、基礎的な知識や認識枠組みを学び直しながら、現代中国における社会科学的分析とは何かをあらためて考えることができた一年となった。

NEARセンター研究員 林 裕明

2013年度の研究において重点的に取り組んだ課題は以下の3点である。

#### ①資本主義の多様性と働き方の国際比較研究

前年度に引き続き京都大学経済研究所の研究助成を得て、経済システムの多様性と働き方・労働モチベーションとの関係について実証および理論的に接近した。多様な経済システム像を前提に、各国における制度構造と働き方・労働モチベーションとの相関関係を明らかにしてきた。一方で、雇用・労働をめぐる制度への人々の適応が働き方を規定していること、他方で、働き方の相違は各国に独自の社会的価値観や法的エンフォースメントの高低によっても規定されることが確認できた。他方で、そもそも労働モチベーションをどのように定義づけるか、どのような研究方法が有効なのかについて明確な解答を得ることはできず、また、国際比較のための分析枠組の精緻化にも大きな前進があったわけではなかった。このことは、労働モチベーションの比較研究という課題が学際的であり、きわめて多くの研究領域にまたがる課題であることを示唆している。未解決の課題の大きさは、それだけ研究課題の魅力の大きさを示していると考えたい。研究を今後も継続したい。

#### ②経済システムとそこでの人間像について

過去の論者の見解に対するレビューを通じて、資本主義・社会主義両経済システムにおいて想定されてきた人間像・人間類型の特徴を理論的に整理することを目的に、NEARセンター客員研究員である新井健一郎氏とともに読書会を実施した。購読した文献は、J.ルソー『人間不平等起源論』およびK.マルクス

『ユダヤ人問題』である。ルソーは、自然状態を人間の望ましい状態と考えているが、同時に人間に固有の性質として自己改善能力を挙げ、人間はたえず変化してゆかざるをえないように宿命づけられているとしている。マルクスは、政治的解放から人間的解放に進む必要を説いている。政治的解放は人間を国家の領域にいる公民と市民社会の領域にいる利己的個人とに分断したに過ぎず、人間的解放はその分断を超克して人間を利己的な存在から共同的な存在とすることである。ルソーもマルクスも人間の変化を展望しているが、その方向性は全く異なっていることを確認した。本研究は今年度も継続して取り組む予定である。

#### ③経済システム面から見た「北東アジア学」創成のための研究

日本とロシア両国の経済システムの変容を比較分析することを通して、経済システム面から見た学問としての「北東アジア学」の創成につなげたいと考えている。2013年度の具体的な課題は、資本主義の多様性の見方にもとづき、日本やロシアに代表される北東アジア地域に位置する国々の経済システムを特徴づけるとともに、多様な経済システムの集合としての北東アジア地域を他の地域経済圏との比較において特徴づけることであった。一般に、B.アマーブルほかにより示された資本主義の多様性論の分析枠組を北東アジア諸国に応用することによって、北東アジア地域に①日本および韓国、②中国およびロシア、③北朝鮮およびモンゴルという3つの型の経済システムが区分されてきた。このことは、EUなどと比較した際の北東アジア地域の多様性の大きさを示していると考えられる。他方で、日本とロシアの働き方の比較を通して明らかにしてきたように、北東アジア地域諸国間には類似性・共通点も大きい。このことは、多様性と類似性を考慮したうえで北東アジア地域を捉えなおす必要があることを示している。従来の「超域」および「拡散と収斂」という視点に「多様性と類似性」という見方を加え、学問としての「北東アジア学」の創成につな

げる糸口を見出したいと模索している。

NEARセンター研究員 **村井 洋**

NEAR第一年目、例えば中庸論のように、西洋思想のあり方を東アジア的な文脈において探る課題は、必ずしも進捗していない。但し以下の如く、幾分かの萌芽は見いだせよう。

#### (1) 二つの公開講座

第一のテーマは「政治家はなぜ言葉を磨くのか—レトリカについて」である。現代的な政治家たちがどんな意識の下にレトリックを採用しているかを考察したかった。このとき参考にしたチャタリス・ブラックの『政治家とレトリック』(Jonathan Chartaris-Black, *Politician and Rhetoric*, 2nd edition, 2010) の書評を『総合政策論叢』第27号に投稿した。このテーマは現段階では未成熟であるが、いずれは判断力研究の論考として仕上げたい。二つ目は「疎開保険論」である。これは当面の北東アジア研究とは別に、東日本大震災以後たち上がった問題意識である。鳥取県智頭町の先行事例をさらに拡大することはできないか。地域振興論と都市防災論との交錯するところを探求していきたい。8月西東京市の情報公開室で短時間の調査を行い、その後東京各区の地域防災計画をチェックした。当該計画書で「疎開保険」に該当する二次避難計画が事後的で場当たりの位置づけしか与えられていないことを確認した。関東大震災後、首都圏から地方へ大量の避難者が移動したこと(北原糸子『関東大震災の社会史』および内務省『大正震災志』)を考慮すれば、今後地方が大都市の構造的欠陥のバックアップ機能を担うべきであるとの思いをさらに強くした。この延長上に、田林明編著『商品化される日本の農業空間』の書評を『総合政策論叢』第28号に投稿した。

#### (2) 市民講座への「押し掛け講師」

2013年秋、映画「ハンナ・アーレント」の封が切られ、アーレントへの関心が高まった。この機会に「普及」に取り組みたいと念願し、

東京都国立市の市民グループ「近代思想研究会」の皆さんが『人間の条件』の読書会に取り組んでいると聞き、8月と3月の二回お願いして講師に出向いた。皆さんの高い関心に驚かされた。

#### (3) 西周シンポジウム

研究会・活動コーディネータとして企画・調整に携わった。今年は特に浜田市民のバスツアーと組み合わせる企画を試みた。

NEARセンター研究員 **ムンフダライ**

2013年度の研究は、主として以下の3つの取り組みを中心に行った。

(1) 近年取り組んでいる漢字音訳に関する研究の延長線上の積み上げとして、2013年度から、「アルタイ諸語の「華夷訳語」のコーパス構築と漢字音訳方式の研究」(学術研究助成基金助成金・基盤研究(C)の研究課題)がスタートした。この研究は、アルタイ諸語の漢字音訳資料の中から、モンゴル語、ウイグル語、女真語が扱われている『華夷訳語』を取り上げて、音訳された語と音訳漢字の対応関係を反映したパラレルコーパスを構築し、これら『華夷訳語』の漢字音訳方式を明らかにすることを目的としている。2013年度は、主に、アルタイ諸語の『華夷訳語』の諸異本から、モンゴル語が扱われている『華夷訳語』と、ウイグル語が扱われている『畏兀兒館訳語』を選定し、それらのローマ字転写テキストと音訳漢字の対応関係を反映したパラレルコーパスを作成した。また、作成したコーパスに基づき、音訳方式の研究に必要な音レベルでの対応関係を含めるデータと、文節レベルでの対応関係を含めるデータを抽出し、データベースを作成した。また、女真語が扱われている『女真訳語』のコーパス作成の作業も始めた。

(2) 上述の研究課題と関連付けて、2013年度から、『華夷訳語』の一種である『日本館訳語』のコーパス構築と漢字音訳方式の研究に取り

組んでいる。2013年度は、主に『日本館訳語』の日本語と音訳漢字の対応関係を含めたパラレルコーパスの構築を完了させ、且つコーパスを利用して、漢字音訳方式の検討に必要とするデータを抽出し、データベースを作成した。

(3) 研究分担者として参加している科研費・研究課題「新発見の音声資料によるモゴール語の総合的研究」に関して、東京で月に1回程度行われたモゴール語研究会に参加し、本学メディアセンターの服部四郎ウラル・アルタイ文庫所蔵モゴール語音声資料の分析と記述を行った。

今後の展望としては、引き続き、アルタイ諸語の『華夷訳語』と『日本館訳語』の漢字音訳方式の研究に取り組んでいく一方、これら『華夷訳語』の漢字音訳方式に対する比較研究も展開していくつもりである。また引き続き、モゴール語音声資料の分析と記述を進め、その成果を取りまとめる予定である。

## 北東アジアの研究最前線 中国の台頭と北東アジア地域秩序の変動

NEARセンター研究員 佐藤 壮

冷戦終結後、四半世紀が経過し、世界は、国境を越えてヒト・モノ・カネ・情報が移動するグローバル化の進展、各地で増加する内戦への介入がもたらす混乱、地域主義・地域統合の深化、民主主義的観念の普及などを目撃している。複雑化を増すこうした国際環境の下で、BRICSを始めとした新興諸国の台頭により国家間のパワーの分布状況に変化が生じる一方、アメリカの覇権衰退が指摘されている。いわゆるパワー・トランジションという転換期を迎え、国際秩序の変動にも関心が寄せられている。すなわち、覇権国アメリカを中心に構築されてきた「自由で、開かれた、ルールを基盤とするリベラルな国際秩序」が、必ずしもリベラルな制度や諸価値を共有しない新興諸国の台頭により変容を迫られるのか

どうか、議論の対象となっている。

台頭する新興諸国の代表格が中国であることは論を俟たない。こうした状況を受けて、国益を重視するリアリズムであれば、国家安全保障の確保と国家経済の発展を重要視する観点から、アメリカと中国の伯仲関係を描くだろう。例えば、中国の積極的な海洋進出は既存の国際秩序への挑戦として受け止められることがあるが、この解釈が妥当だとすれば、中国は既存の国際秩序の何に対して挑んでおり、中国の対外行動の何が挑戦的と見なされるのであろうか。中国の大国化が既存のリベラルな国際秩序に変容をもたらすとすれば、それは新たな国際秩序の出現を意味するのであろうか。中国は、どのような特徴を持つ国際秩序の形成を目指しているのであろうか。

こうした問いに対しては、近年、アジアに関心を寄せる国際政治学者らが、様々な理論的アプローチに基づいて議論を展開している。パワー・トランジション論は米中間での覇権交代劇を予測し、リベラル制度論は既存の国際制度の継続がもたらす利益が中国を懐柔する可能性を示唆する。社会構成主義は、経済や軍事などの物質的側面に加えて、アイディア、信条、価値体系などの非物質的側面が共有化された国際規範が国際秩序形成に与える影響に着目する。その中でも、「中国化」(sinicization) をキーワードにして、中国がつくる国際秩序を描き出そうとする試みがある。方法論的折衷主義を提唱するアメリカの国際政治学者カッツェンスタイン (Peter J. Katzenstein) は、「中国化」を欧州化・アメリカ化・日本化・インド化・イスラム化と比較可能な文明的なプロセスと位置づけ、「世界を中国と中国人に適したものに資するシステムや社会的なメカニズム」として「中国化」を表現し、国内的・国際的な次元における同化と文化触変 (assimilation and acculturation) のプロセスを含むとしている。カッツェンスタインはかねてから世界政治における地域主義に着目した研究を展開し、近年「文明論三部作 (trilogy)」を上梓している。しかし、多元主義に基づき諸文明間の衝突よりも共存を論じる一方で、「中国化」の具体

的な内容や「中国化」がもたらす国際秩序像については十分な検討がなされていない。

そこで、筆者が研究代表を務める共同研究プロジェクト「中国の台頭と北東アジア地域秩序の変動—中国国内統治との共振性に着目して—」（平成26～27年度北東アジア地域学術交流研究助成金）では、現在の中国を過渡期の大国としてとらえ、大国中国の国家主権と国際社会における責任のあり方を検討することを通じて、中国が大国として世界と関わる中で描き出される自画像やアイデンティティ、提示される世界観、形成途上にある国際秩序の方向性を見極めることを目論んでいる。

とりわけ、中国が、安全保障、貿易、金融、環境、疾病、人道等に関わるグローバルあるいはリージョナルな課題に関して、国際公共財のガバナンス（国際レジームの形成・維持・管理）にどのように関与するのか、主権と責任の観点から検討したい。はたして、国際公共財への関与とは、国際社会の要請に応え大国としての責任を果たすものなのか、国家主権に制約が加えられるものなのか、それとも、あくまでも国益を追求する手段に過ぎないのだろうか。たとえば、国際経済秩序への関与に関して、中国は、他の新興国と共に「新開発銀行」（New Development Bank。いわゆるBRICS銀行）の設立を主導し、アジア・インフラ投資銀行（Asian Infrastructure & Investment Bank）の設立を提唱している。これらは、既存のアジア開発銀行（日本が歴代総裁を輩出）への対抗なのだろうか。また、既存の国際経済秩序とどのような相互補完関係を構築しうるのだろうか。

安全保障分野では、中国は、武力を伴う人道的介入には国家主権や内政干渉との関連で慎重な立場を取る一方で、国連PKOへの積極的参加を集団安全保障体制強化の一環として位置づけたり、地域紛争での斡旋・仲介外交への積極的関与を「創造的介入」（王逸舟教授）と位置づけたりする議論もある。また、「保護する責任responsibility to protect (R2P)」よりも「責任ある保護responsible protection (RP)」(Prof. Ruan Zongze) を主張する議論もある。これらは、国家主権と

介入に関する新たな国際規範の形成を模索する動きと捉えることは可能だろうか。

国際経済分野や国際安全保障分野での国際公共財の提供や、国際機関・国際レジームへの関与を通じたグローバル・ガバナンスへの参画によって、中国は、国家主権や大国の責任に関する国際規範の提唱者（規範起業家）として、国際秩序の形成に影響を与えるのだろうか。同時に、国際的なポジションの変化に伴い国益を再定義し、国家主権や大国の責任に新機軸を打ち出すことは、政権の国内的な正統性確保(国内社会の持続的発展の堅持、対内主権と国内統合の強化、政治腐敗や社会不安の解消と「中国の夢」の実現への責任等)とどのように共振するのであろうか。

第一次世界大戦の勃発から100周年にあたる本年（2014年）、東アジア情勢の緊迫度は第一次大戦前夜のヨーロッパになぞらえられる向きもある。以上の論点を検討することを通じて、転換期の渦中にある中国と日本、中国と国際社会が、相互触発しながらどのような関係を構築するのか、理解する試みとしたい。

## NEAR Recommends

《NEARセンター研究員が、硬軟織り交ぜてお薦め図書を紹介します（編集部）》

NEARセンター研究員 **村井 洋**

まず取り上げたいのは、フランス語から英訳され、アメリカでベストセラーになった『21世紀の資本（論）』（Thomas Piketty, *Capital in the Twenty-First Century*, Harvard University Press, 2014）です。といっても700頁近い本書、立ち読み程度の印象と朝日新聞の記事（二〇一四年六月一四日）、『世界』二〇一四年七月の紹介文を参考に、日本と中国に関わる記述を少しだけ覗くことにしましょう（12月に山形浩生さんによる翻訳が出る予定です）。現代資本主義社会で少数者に資本が集中する傾向を指摘するのが本書の

主張です。では成長著しい中国がやり玉に挙がるのかということとそうでもない。確かに21世紀の終わりには世界の資本の半分がアジアのものになるという予測は為されるものの、富の集中度はインドやインドネシアよりも低いと見ている (p.327)。日本はドイツ、フランスなどヨーロッパの「古い世界」と同様のパターンをとり、1945年以降大きく富の集中度を下げ、人口の上位0.1%が国民所得の2～25%を得る形で推移していると指摘しています (322頁)。どうやら著者は特定の「国」によりも個人に資本が集中することを問題とみているようです。

本書は資本主義の全体構造に長期的な視野から取り組んだもので、この点でD.ハーヴェイやレギュラシオン学派と軌を一にしています。その流れにあるR.セネット『不安な経済／漂流する個人』(森田典生訳大月書店2008年)ではハイテク産業など好景気を中心地で働く人々の心性として、「短期的に考え、自らの潜在性を伸ばし、何ごとも後悔しない新しい人間でなければ富はえられない」と述べているのが印象的でした。関連して取り上げたいのは水野和夫『資本主義の終焉と歴史の危機』(集英社新書 2014)で、利子率の低下が資本投下のフロンティアの消滅を意味し、若干のタイムラグの後には全世界的に経済の停滞が生じると説いた書物です。歴史的な論拠を利用している点が本書の特徴でしょう。

歴史といえば、白井聡『永続敗戦論』(太田出版 2013年)を取り上げましょう。「永続敗戦」とは「敗戦を否認しているがゆえに対米従属を続けなければならず、深い対米従属を続けている限り、敗戦を否認し続けることができる」言説のことです。批判として鋭いものを感じましたが、積極的な立場の提示をはっきり見届けることができませんでした。歴史から逃げることなく思考と判断を行うこととすべきでしょうか。本書の流れに沿う主張としては武藤光朗の「憲法ペルソナ論」から加藤典洋『敗戦後論』、小倉紀蔵『歴史認識を乗り越える』さらに鶴見俊輔『戦争が遺したもの』、丸山真男にいたるまでの広い振り幅で捉えられると思えます。

最後に二冊、文字通りお勧めします。岩下明裕編著『領土という病』(北海道大学出版会、2014)は、領土問題を柔軟に捉え、近代主権国家を広い視野から見る、充実した議論が盛り込まれています。上野英雄編『ダムを造らない社会へ』(新泉社、2013)は川との共生をめざした市民社会のエネルギーを感じさせる熱気溢れる一冊です。

## NEAR短信

(2014年4月～9月)

### ○北東アジア研究会第1回例会

【日 時】

2014年5月13日(火) 16:40～18:30

【場 所】

講義・研究棟3階 会議室C

【報告者・テーマ】

山本健三氏 (NEARセンター研究員) 「ミハイル・バクレーニンの逆説的黄禍論とその思想史的意義」

### ○第35回日韓・日朝交流史研究会、北東アジア研究会第2回例会

【日 時】

2014年6月24日(火) 16:40～18:30

【場 所】

講義・研究棟3階 会議室C

【報告者・テーマ】

高一氏 (NEARセンター研究員) 「北朝鮮外交と南北対話1970-1973」

### ○第36回日韓・日朝交流史研究会、北東アジア研究会第3回例会

【日 時】

2014年6月27日(金) 16:40～18:10

【場 所】

講義・研究棟2階 会議室A

【報告者・テーマ】

鹿錫俊氏 (大東文化大学国際関係学部教授) 「日中関係における『心の問題』に関する所感」

## NEARセンター市民研究員の活動一覧 (2014年4月～9月)

### ○第1回NEARセンター交流懇談の集いの開催

【日時】

2014年4月19日（土）13：00～17：00

【場所】

島根県立大学交流センター1階 研修室

【内容】

NEARセンター長あいさつ、NEARセンター概要・市民研究員制度説明、参加者自己紹介、前年度市民研究員登録者の体験談など。

### ○第2回NEARセンター交流懇談の集いの開催

【日時】

2014年5月10日（土）13：00～17：00

【場所】

島根県立大学交流センター1階 研修室

【内容】

NEARセンター長あいさつ、NEARセンター概要・市民研究員制度説明、参加者自己紹介、大学院生との共同研究のためのマッチング、グループ・リサーチ・サロンについての説明など。

### ○第1回市民研究員全体会の開催

【日時】

2014年5月17日（土）13：00～16：30

【場所】

島根県立大学講義・研究棟1階 中講義室4

【内容】

NEARセンター長あいさつ、NEARセンター研究員自己紹介、市民研究員代表委員の紹介、市民研究員自己紹介、大学院生自己紹介、記念撮影・休憩、アカデミック・サロン（村井洋研究員）、グループ・リサーチ・サロンのグループ分けおよび共同研究のマッチング、施設案内（希望者）

### ○第1回市民研究員研究会の開催

【日時】

2014年7月5日（土）14：00～16：30

【場所】

島根県立大学講義・研究棟1階 中講義室4

【内容】

開会あいさつ、「市民研究員と大学院生の共同研究」助成事業採択研究課題の発表、第一部：NEARアカデミック・サロン 佐藤壮研究員「日本人の好きなカナダ、カナダの中の日本」、第二部：市民研究員の発表報告 豊島秀明氏「丸木舟による対馬海峡西水道横断 日韓共同プロジェクトについて ご報告と御礼」、楫ヶ瀬孝氏「明治期における廻船問屋の船検帳について」

### ○平成26年度NEARセンター市民研究員と大学院生の共同研究助成事業に3件の研究課題が採択されました。

- ・王賀、滑純雄「中国政府の自動車産業発展政策と日本自動車メーカーと関連部品メーカーの中国市場対応—マツダと関連部品企業を事例にして」
- ・王曉慧、岡崎秀紀、小菅良豪「日本における中国文化の受容—日本における孔子学院の影響から見る」
- ・孫萌、澁谷善明「若者の力による地域振興の諸政策の日中比較—中国の大学生村官制度を中心にして—」

## NEAR News 第46号

2014年12月発行

【編集発行】

島根県立大学北東アジア地域研究センター  
〒697-0016

島根県浜田市野原町2433-2

Tel 0855-24-2375

Fax 0855-24-2383

E-mail:near-c@u-shimane.ac.jp

ホームページ:<http://hamada.u-shimane.ac.jp/research/organization/near>